

この東大見学会、企業、大学訪問の二日間では、さまざまな人との出会い、あらたな発見があり、とても二日間の出来事とは思えないほど濃密な時間を過ごすことができた。この研修で体験したことのうち、最も印象に残ったディレクトフォース、企業大学訪問、OB・OG 懇談会について感想を述べたいと思う。

#### ディレクトフォース

まず、ディレクトフォースについて。混雑した人の往来を通り抜け、ジメジメした暑さに耐えてたどり着いた国際会議場は、とてもきれいで立派だった。また、一人一人の椅子に置いてあったお茶にディレクトフォースの方々のお気遣いを感じ、素晴らしい環境で企画に臨めるありがたさを感じた。

まず、笹川平和財団理事長の田中伸男さんの講演をお聞きした。元 IEF の事務局長を務められていたとあって、たくさんの国の首相と一緒に写真を何枚も見せて頂き、田中さんの知名度の高さ、人脈の広さを理解した。また、講演の内容もとても興味深く、例えば石油の供給が減った時のために各国でかなり大量の備蓄を用意していること。アメリカの石油輸入の減少で中東情勢が変化するかもしれないこと。また、今の日本は電気の供給を火力発電にほとんど頼っていることもお聞きした。

「アメリカが石油を輸入しなくなり中東を重要視しなくなったら、中東でテロや戦争が起きやすくなって日本の石油輸入がストップし、多くの地域で長期間停電になってしまうかもしれない。その停電を防ぐために原子力発電は重要な電気の供給源の一つなんだ。」  
今、世の中では盛んに「脱原発」と叫ばれており、その風潮に私も流され原発をなんとなく悪いものだと認識していた。しかし、田中さんのお話により原発にも大きなメリットがあることを理解でき、物事の両面性を承知したうえで批評することが大切だと分かった。

次に、財団とのグループセッションでは、私は正に「啓蒙」されたという気分になった。つまり、自分の考えが変わったということである。私が話を聞いた方々はほとんどが海外経験があり、中には十年以上滞在歴のある方もいらっしやった。そのような講師の方々に共通していたのは信念が「何かしらの発言をする」ということだった。私たちがいる講師の方のお話を聞き終え、質問をふられた時に少しの間、沈黙してしまったことがあった。その時にその講師の方次のおっしゃった。

「何か発言をしなさい。国際場裡において、一言もしゃべらないということは何も考えを持っていないと見なされ、存在価値のない人と思われてしまうんだ。」

正直、少々きつい言い方だと思った。しかし言われてみると、真にその通りだ。確かに私はほかの人の話に受動的で、その時、その時に頭に思い浮かぶ質問はほとんどない。また、自分の考えを雰囲気に合わせて、一周囲の様子を見て一言も言わなかったり、自分の考えを分かってくれているだろうと思いついて言えなかったりすることがよくある。私は日本的な「空気

を読む」、「以心伝心」的な感性の虜になってしまっており、話し相手の寛容さに依存してしまっていることに気が付いた。

「若いうちに留学するといい」。よく言われることで、言語能力の獲得こそが留学の唯一の目的だと思っていた。だが、地元の狭いコミュニティーを離れ、広大で未見の地において自図から発言しなければならない状況に自分を追い込み鍛えることも一つ重要な目的だと思った。

## 企業大学訪問

虎の門液から電車に乗り、慌ただしく昼食を済ませ次に向かったのは東京大学分子細胞生物学研究所の小林武彦教授の研究室である。まず、「東大駅前」という東大の存在感を感じさせる駅で下車し、向かった先には歴史を感じさせる東大の建物が並び、道には樹齢百年以上ありそうな大きさの木が空を覆うように立っていた。東大の日本の大学の王者たる風格に息を飲んだ。そして、そこで感じた感動よりも勝る面白さが、小林教授の研究室訪問にあった。

今、私たちは生物基礎で細胞や遺伝子のことを学んでおり、それに関連する分野の研究所を探していて、小林教授に行き着いた。予習していた通り、小林教授の研究テーマの「寿命はなぜ決まっているのか」については私たちの学んだことをもって理解できる内容だったため、とても面白かった。教授によると寿命の決定は遺伝子の壊れやすさによって決まっているらしく、最も壊れやすいというものがリゾホーム RNA 反復遺伝子というものである。この遺伝子は同じ遺伝子が何百回も繰り返して存在していてこんがらがりがやすく不安定な領域だそうだ。そして、教授はその遺伝子が壊れないように近くで遺伝子を支えるタンパク質「SIR2」について研究しており、最近では、「SIR2」の作用する反応経路を明らかにすることができた。その研究に至るまでの過程や新しい発見について説明して頂き、世界の誰も知らないことを解き明かして行く研究者の仕事にさらに憧れを感じた。

また、研究室の設備や研究をする上での技術についても教えて頂いた。

右の写真は、次世代シーケンサという機械で、ゲノムの塩基配列の読み取りに使われる。なぜ、「次世代」かというと旧型シーケンサとの性能差に理由があり、比喻で表すと旧型は江戸時代の殿様一人が乗るようなかご、次世代の方は、数百人が乗れる旅客用ジェット機ほどの効率の違いがあるそうだ。そして、もう一枚の写真は通常の光学顕微鏡の解像度の限界を超えた超解像度で対象を観察できる顕微鏡だ。この顕微鏡の開発者は2014年にノーベル賞を授与されており、そのような最新機器も揃っている。



今回、小林教授と研究室の方々には世界最先端の研究を紹介してもらい、とても貴重な経験となった。いろいろと準備をして下さり、予定よりも一時間半も長く滞在させて頂いて、とても感謝している。

## OB・OG 懇談会

そして、OB・OG の方々との懇談会について、今回は十五人の方々に来ていただいた。そのうち十三人は東京大学で勉強されており、他の二人も一橋大学、東京医科歯科大学とエリート揃いであり、私はそのような二高を代表する先輩方のお話を聴けるこの懇談会をとても楽しみにしていた。

私が先輩方に質問した内容は、当然ながら勉強のことである。最難関大に合格できる程の力を持つ先輩方に、高校時代どのような勉強をしていたのかについて、自分もそのような大学を目指す身としては、これが一番聞きたいことだった。そうして答えたいいただいた回答の中に一つ、衝撃的なものがあった。それは、

「自分に必要ない授業は出ない」

だ。さすがに、この意見には異論があり、私も学校の授業をおろそかにすることはできないが、「実質的に価値のある行動を追及する姿勢」にはとても納得した。私の今の悩みは時間があり過ぎるために生産性のない時間を過ごしてしまうことが多いことだ。生産性のない時間というのは、例えば、ネットを見たり、居眠りをしたりすることだ。私は運動部に入りたかったが、入らなかった。なぜなら、勉強をするためである。しかし、それが仇となって今では、自堕落な生活を送ってしまっている。他の先輩方から聞いた勉強のアドバイスでも、「問題集は1周解いたら間違ったところだけを復習する」や「塾に行くメリットは自分の理解できなかったところを質問・添削することだ」など、やはり自分にとって実りのある勉強をしようとする意志があるように感じられた。私も、今、自分のしている行動に意味はあるのか、自分が目指す将来に向けて、すべきことは何なのか、常に価値判断をしながら生活したいと思った。